

SNSで魅力発信!

男前コメ農家の挑戦

秋田県北秋田市 (JAあきた北央管内)

秋田が誇る農業で、秋田を元気に……。

そんな思いから立ち上がった、若手コメ農家集団「トラ男」のプロジェクト。

彼らの魂には、地元と農への熱い思いが宿っている。

文・渡辺征治 写真・鈴木加寿彦





澤藤さんが抱えているのは「トラ男米」の袋。自身の顔写真入りだ

燃

える愛業家TAKUMI
くアンダーグラウンド・
ウォーターウェイ農法」

「金色の山男YUTAKAの
一〇〇〇フィート千枚田農法」「水
田の貴公子TAKAOの八〇〇〇年
ミネラルウォーター農法」……。

「なにこれ？」と、首をひねらずに
はいられないホームページのセンス。
秋田の若手コメ農家集団「トラ男」
は、ガツンと力強い男の感性と、遊
びさえもまじめに取り組む熱いスピ
リッツで満ちている。

「ウォーターウェイはようするに暗
渠きょのことで（笑）、しつかり排水を
しているということなんですけど
ね」と澤藤匠さん（26）がニヤリ。

「一〇〇〇フィートは標高三〇〇メ
ートル。うちは山の中の棚田なんで
すよ」とクールな鈴木豊さん（30）。

ホームページの仕掛け人、武田昌
大さん（28）はノートパソコン片手に
言いきる。

「トラクターに乗った男前、でトラ
男。鈴木さんと澤藤さんと、もう一
人八峰町（JA秋田やまもと管内）
の農家タカオさん（30・ワークネー
ム）も合わせて三人の、YUMEが
持てる、YARRIGAIがある、Y
OMEがやってくる『3Y』な農業

をコンセプトに、秋田を元気にする
男たちです」

その武器がSNS（ソーシャル・
ネットワーキング・サービス）。パ
ソコンやスマートフォンを使って、
どんなに離れた相手とでも会話をす
るようにコミュニケーションできる、
ツイッターやフェイスブックなどの
サービスだ。たとえば澤藤さんのツ
イッターにアクセスすると、「全部
で三十袋の肥料手まき……二の腕パ
ンプアップ」などと、なるほど農作
業中の「つぶやき」が、顔文字とと
もに並んでいる。

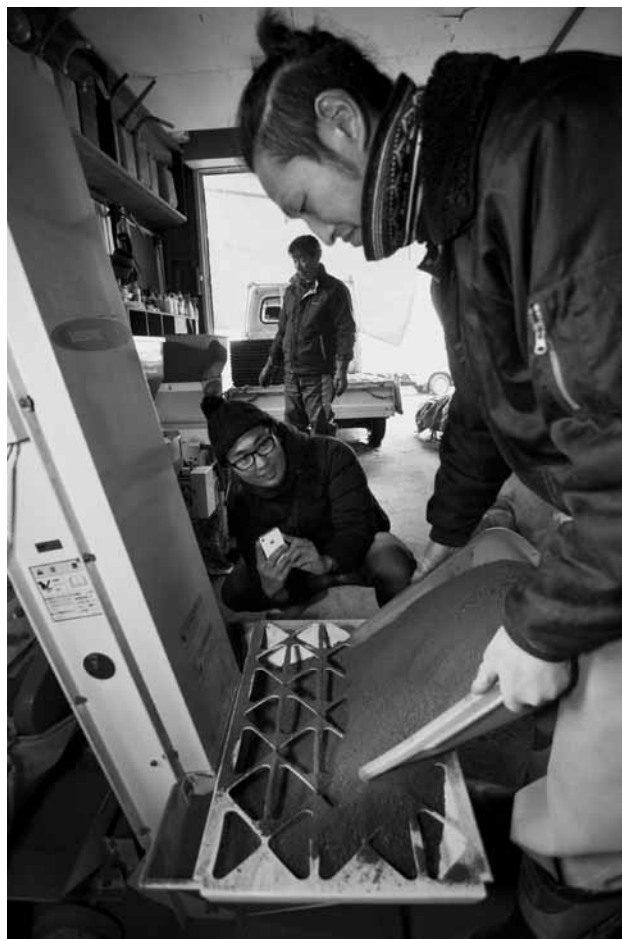
1T×農業の 出会いから

平成二十二年、東京でコンピユー
ターゲーム会社に契約社員として勤
めていた武田さんは、ある思いを抱
き続けていた。

「北秋田市の実家へ帰省するたびに、
地域に元気がなくなっていく光景が
目に留まる。なんとか活性化できる
方法がないかと、秋田のいいところ
も悪いところも、調べ続けていまし
た。で、高齢化とかいろいろ課題は
あるけれど、いいところの一つは農
業があることだと思ったんです」

会社に勤めながら、武田さんはデ

スマートフォンを片手に写真を撮る鈴木さんと武田さん。作業中の様子を収めることで、「なう（今）」を伝える



デジタルコンテンツ技術者を専門に育成する大学院の夜間部で学んでいたSNSが広まり始めた頃である。「これを使って、農」で秋田を元気にしたい、できると思っただけです。プロジェクトの方向性をまとめて、週末ごとに秋田じゅうを回り、いっしょに取り組む農家を探しました「そんなさなかに参加した秋田地域振興局の「農業近代化ゼミナール」で、武田さんは現在のトラ男メンバーに出会う。それは彼らにとっても、渡りに船のタイミングだった。「農のモチベーションを保ち続けるため、インターネットでの直販に取

日本初の「ソーシャルファーマー」

り組んでみたいと考えて、ゼミに参加していました」（鈴木さん）

「おれもそう。でも、これだけネット全盛なのに、当時はパソコンすら持っていませんでした。武田さんの『携帯電話でもできるよ』という言葉が新鮮でした」（澤藤さん）

平成二十二年五月。武田さんの指導のもと、ツイッターでのトラ男情報発信が始まった。いま、していることや思っていることなどを、百四十字以内でインターネット上にツイートする（つぶやく）SNSである。「言われたように、携帯からつぶや

プロジェクトリーダーの武田昌大さん。自身もいずれば就農を考えているという



いてみたんです。レス（反応）が返ってくるまで、どれくらいかかったかな……少々我慢でしたね。ある日、『がんばってください』とひと言、応援のツイートがあった。そして地元ラジオ局のパーソナリティーも応援レスをくれた頃から、自分のツイートを見てくれる『フォロワー』が、ぐんと増えました」と澤藤さん。

「いま、なにをやっているのかを伝えることがたいせつ」と、武田さんはひとときわ熱く語る。

「価値は『なう』にこそあるんですよ。いいレスをもらうためには、昨日〇〇しました、では遅いんです！SNSを使い始めるけれども、その一方で、実際の出会いもぜったにたいせつ。トラ男とお客さんが出会う場を設けました」

十月、新米の季節。トラ男米の販売サイトを立ち上げ、同時に東京・秋葉原の貸しスペースで、初めてのイベントを開催した。タイトルは、



つねに持ち歩くノートパソコンから、フェイスブックやツイッターを更新する

幅広い世代に、 トラ男ファンを つくっていききたい

した」

イベントは毎回企画を変えて定期的に開催。秋田の郷土料理きりたんぼ鍋を作って食べたり、IT業界の著名人を招き、IT×農業のトークセッションを開催したりなど。興味を引く仕掛けが用意されている。

より秋田の地に 足をつけて

SNSで前例のない新しい一步を踏み出したトラ男たち。しかし課題もある、と武田さんは分析する。

「トラ男のファンはSNSを使う二十〜三十代が中心。四十〜六十代のお米を味わい分けるもつとも味覚の鋭い層と、トラ男は出会うチャンスが少ない。ぼくたちにはまだ、なにかが必要です」

トラ男それぞれは、よりおいしい米作りとふるさと奮起のために、意欲をみなぎらせている。

「いずれ無農業にも挑戦して、商品の幅を広げたい。農業経営を株式会社化して、より安全・安心と味にこだわっていききたい」(鈴木さん)

「経験の浅い自分が言うのはどうかと思うけど、農家はもろんJ Aも、おたがいに研鑽(けんさん)し合って、農の力を高めていかなくてはならないと思う。

最近、青年部の盟友も何人かSNSを始めました。こうしておたがいに新しいことに挑戦していけたらと思います」(澤藤さん)

プロジェクトリーダーの眼鏡の奥では、策を練る目が輝いている。

「毎月、お米の配達日にはかならずぼくも秋田に来て、発送の袋詰めやシール貼りなどを手伝います。目標としては、あと二年で秋田へUターンして、トラ男とともに、地域づくりに汗を流したい。ぼく自身も農業をやるかもしれないし」

トラ男の快進撃は続きそうだ。



左から

武田昌大さん
北秋田市(旧鷹巣町)出身、東京在住。フリーのIT技術者にして「トラ男米」販売を担う(株)KEDAMA(けだま)代表。

鈴木豊さん
就農して4年、北秋田市阿仁で水田18ha、ハウス栽培トマト2aを経営。マタギの里と呼ばれる山あいの棚田で奮闘中。

澤藤匠さん
就農して6年、北秋田市合川で水田3ha、果樹3.2haを経営。果樹はリンゴのみだったが、就農を機にモモ0.2haにも挑戦。